

気温が平年並に推移したことから、6月中旬移植の水稻の生育は、高温で経過した前年と比較してやや遅れています。そのため、出穂期（幼穂長から予想）も前年よりやや遅くなる見込みです。気象庁の3か月予報（7月21日発表）によると、8月の平均気温は高い確率が50%、9月の平均気温は平年並みと予想されています。今後は生育状況を十分に観察し圃場条件に応じた適切な水管理や適期収穫など基本技術の徹底に努めましょう。

1 適切な水管理

- 引き続き、間断かん水を行いましょう。特に、出穂期～開花期は最も水を必要とする時期です。水不足にならないよう、こまめな間断かん水を実施してください。開花期以降は、徐々にかん水間隔を延ばしましょう。
- 出穂期から登熟期にかけて異常高温となった場合は、胴割米や乳白米が発生しやすくなります。水温の下がる夕方から夜間にかん水を行い、地温を下げて根の活力維持を図りましょう。可能であればかけ流しも有効です（水利条件に応じて実施してください）。
- 台風襲来時の強風や、台風通過後の乾燥した強風（フェーン現象）が予想される場合は、やや深水管理とし、脱水による乳白米や青枯症の発生を防ぎましょう。
- 落水時期は出穂後30日以降とし、品質・食味の向上を図りましょう。それまでは間断かん水を継続し、根の活性の維持に努めてください。

2 斑点米カメムシ類の防除対策

○ 除草

カメムシ類の対策は除草が基本です。水田周辺のイネ科雑草の結実を長期間抑え、カメムシ類の水田への侵入を防ぐため、水稻の出穂2～3週間前と出穂期頃の2回、除草を行いましょう。両時期の除草ができない場合は、水稻の出穂期10日前までに除草を行いましょう。

※出穂期とは、一粒でも止葉から籾が出た状態を出穂とみなし、ほ場全体の茎数の40～50%が出穂した日のことです。

※出穂期前後のみの除草は、カメムシ類を水田へ追い込み、水稻の穂への加害を集中させるおそれがあるため、原則行わないようにしまししょう。

○ 薬剤防除

（1）不稔防止のため、出穂期に1回目の薬剤散布を実施しまししょう。（イネカメムシ対策）

（2）斑点米防止のため、出穂期の7～10日後頃に2回目の薬剤散布を実施しまししょう。その後も発生が認められる場合は、7～10日間隔で1～2回の追加防除を実施しまししょう。（イネカメムシを含むすべての斑点米カメムシ類対策）

※粒剤や豆つぶ剤は、小型のカメムシ類（イネホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ）に対して高い防除効果があります。一方、大型のカメムシ類（イネカメムシ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ）では、薬剤が虫に直接かからないと十分な効果が得られません。そのため、大型のカメムシ類に対しては、粉剤や液剤による防除がより効果的です。



イネカメムシの成虫
(体長12～13mm)

3 雑草種子の混入について

- 近年、ライスセンターで荷受けされる粳や玄米への雑草種子の混入が見受けられます。特にクサネム、ヒエの混入が目立っていますので十分注意してください。

クサネム 容易に抜き取ることができるため、収穫前に手で抜き取りましょう。水路沿いから侵入することもあるので、水回りの管理時に発生がないか確認しましょう。

ヒエ 収穫前に鎌などで除草してから収穫作業を行いましょう。また、除草したヒエを畦やほ場周辺に放置すると、種子が落下して翌年の発生源になります。除草したヒエは、水稻ほ場の外へ適切に処分しましょう。多発しているほ場では、来年の除草体系や水管理を見直しましょう。

4 適期収穫を行いましょう

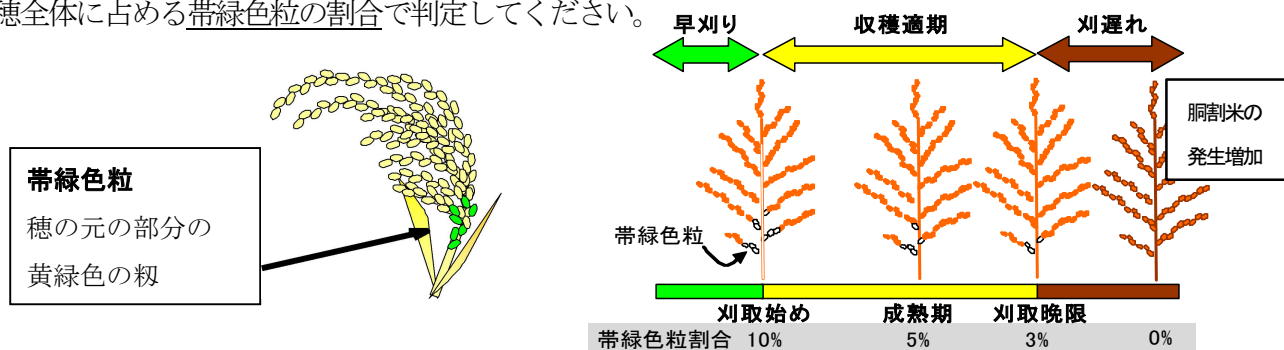
- 収穫作業は、帯緑色粒率が10%になったら開始し、3%になるまでに終了しましょう。葉や枝梗は緑色であっても、粳はすでに黄化し、刈取適期を過ぎている場合がありますので注意しましょう。

☑ 早刈りは青米の増加や減収の原因となります。

☑ 刈り遅れは胴割米の発生や、色沢の低下を招き品質・食味の低下につながります。

【刈取適期の判定方法】

- 平均的な生育をしている数か所で、5～6本の穂をまとめて握ります。
- 穂全体に占める帯緑色粒の割合で判定してください。



5 適切な乾燥調製作業について

① 粳水分と刈取時期

刈取り粳水分は25%以下を目安とし、適期に収穫しましょう。適期を過ぎ、立毛状態で過乾燥になると胴割米発生の危険性が高まります。

コンバイン各部の清掃を徹底し、他品種や前年の粳、麦などが混入しないよう注意して下さい。

高水分の粳は長時間放置せず、速やかに乾燥機へ投入し、通風乾燥を行いましょう。

② 乾燥温度

乾燥不足や過乾燥を防ぐため、必ず水分計を用いて正確に水分測定を行いましょう。乾燥ムラは、夾雑物の混入による乾燥機内の循環不良や、水分較差（粳の水分含量のばらつき）が大きい粳の混合などにより発生します。

胴割れの増加を防ぐため、高水分粳の高温による急激な乾燥は絶対に避けてください。

高水分粳は、まず通風乾燥を行った後、35℃程度の低温で時間をかけて乾燥しましょう。高水分粳の放置や急激な乾燥による品質低下が生じないように注意してください。

目標水分値 14.5%で乾燥調製を行いましょう。



9月～11月は「秋の農作業安全確認運動」の実施期間です。

コンバイン作業中にわらが詰まった際は、エンジン停止後に除去